

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：17702

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520505

研究課題名（和文） 音楽を使った英語教育及び異文化コミュニケーション教育

研究課題名（英文） Teaching English and Cross-cultural Communication through Music

研究代表者

宮下 和子（MIYASHITA KAZUKO）

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：20182016

研究成果の概要（和文）：

英語教育とは単なるスキル習得ではなく、ヒューマニティを伴う異文化コミュニケーション教育でもある。歌詞(英語)の和訳(=異文化翻訳)に果たすメロディの役割を自主教材で伝え、ライフ・ワークのスティーブン・フォスターについて、日本ではその「アメリカ性」、米国では「日本性」を伝え、日米交流に寄与できた。2013年12月、米国より2名を招へいし、立命館大学で日本初の「フォスター歌・レクチャーコンサートと国際シンポジウム」を開催できるのは本研究の最大の成果と言え、感謝の念で準備中である。

研究成果の概要（英文）：

When we teach English, we teach not just the English language (the grammar and vocabulary) but also the culture of the countries where English is spoken as a native language. This helps language learners to better realize the humanity they share with the people in those countries. My textbooks helped me convey the important role of melodies in terms of cross-cultural interpretation from English lyrics into their Japanese translation. Through my studies on Stephen Foster, I have contributed to US-Japan communication by introducing Foster as Americana to Japanese and as Japanese heritage to Americans. I'm currently working on Japan's first lecture-concert & international symposium on Foster, scheduled for December 7, 2013, at Ritsumeikan University in Kyoto, where two Americans will be the among speakers. I see this as the biggest reward of my five years of funded research for which I am very grateful.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：英語教育、アメリカ研究、異文化コミュニケーション、日米交流

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：英語教育、アメリカ研究、音楽、異文化コミュニケーション教育、日米交流、スティーブン・フォスター、異文化翻訳、教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、大学英語教育において当初よりアメリカ音楽を導入し、英詩という異文化の対訳という自文化への翻訳にも挑戦するに至った。最終和訳までには、米語が包含する宗教や人種問題など多様な挑戦を伴うが、英語と日本語間の往来という異文化翻訳の意義は大きい。また米国史と連動する音楽を通じた米国理解の可能性を展望する。

米音楽 20 曲を英語の歌詞を対訳と共にテキスト化した『音楽でコミュニケーション』(1997年初版)は、2002年の2訂版に1999年9月から10ヶ月間のピッツバーグ大学とウィリアム&メアリー大学におけるフルブライトラーとしての研究成果を編みこんだ。

さらに、2006年にはメロディが奏でる異文化翻訳という視座で数曲を差し替えた『音楽で異文化コミュニケーション』(新版)を刊行した。本書は、アメリカ音楽を具体性と抽象性の統合と捉え、対訳という異文化翻訳に伴うメロディの果たす役割を意識したもので、具体性としての英詩を素材としながら、抽象性の「サウンド」をより重視した。つまり、サウンドこそが異文化から自文化へとリンクする架け橋となるという視座を得る。

大学改革による教養学部の解体から久しいが、高等教育現場における教養科目や人文学のトーンダウンに警鐘を鳴らす声も聞かれる。英語教育を単なるスキル伝達ではなく、異文化コミュニケーション活動を伴うヒューマニティと捉えることには意義がある。そうした意味で音楽を使った英語教育の可能性と方法の研究は有意義な展望を持つ。それまでの実践を基に、よりグローバルな多様性を視野に入れた多角的研究に基づくとともに、同時代性を反映する教材開発を目指し、教育現場での実践に結び付けようという背景のもとに本研究に臨むことにした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、代表者の10余年に及ぶ試行錯誤の英語教育実践と一連の教材作成に基づき、音楽を使った英語教育及び異文化コミュニケーション教育の可能性と方法を研究し、教材開発の進化と今後の展望を探ることにあつた。具体的には、英語(異文化)から日本語(自文化)への翻訳を「メロディが奏でる異文化翻訳」と位置づけ、異文化コミュニケーションという視点で考察する。つまり、米音楽の異文化翻訳を、英詩から和訳という具体性の変換プロセスにメロディという抽象性が統合された感性として捉えた。さらに、米国史と連動するアメリカ音楽を考察するとともに、日本人とフォスター音楽の意義を通し、日米の異文化交流に果たす米音楽の意義を考察し、音楽を通じた米国理解の

可能性を展望することにした。

研究活動の継続には、国内外の学会での情報及び意見交換、また研究発表を通して研鑽を積む。さらに、グローバルな視点では、ピッツバーグ大学スティーブン・フォスター記念館館長のルート博士との共同研究やSAM(Society for American Music: アメリカ音楽学会)における活動を継続し、最終的には、日本においてフォスターに関するレクチャー・コンサーや国際シンポジウムの開催を実現し、日米の異文化交流の一助とする目標を掲げた。

## 3. 研究の方法

### (1) 教材開発の進化

2008年の米国大統領選でのオバマ氏勝利のひと月後の12月に発表されたCDアルバム、*YES, WE CAN—Voices of a Grassroots Movement*は、オバマ氏と故キング牧師の演説をちりばめた18曲からなり、新教材『音楽で異文化コミュニケーション2～歌い継ぐアメリカ』の開発へと触発された。また、前著『音楽で異文化コミュニケーション』も新たな視点で新版に向けて更新を図った。

### (2) 国内外における研究発表

(1)の♪*YES WE CAN*について、歌い継ぐ歴史コミュニケーションとして、また織り込まれたスPOークン・ワードの意義など、日本コミュニケーション学会や大学英語教育学会で研究発表を目指した。

また、2010年2月、米国ピッツバーグ大学フォスター記念館のルート館長より、4月に開催する初のフォスター・シンポジウムへの招聘を受け、2月後半、放送大学鹿児島学習センターでの特別講義にて、80名の受講者にフォスターについてアンケート調査を実施し、準備を開始した。

### (3) 論文発表

研究発表を基にした論文を学会誌や学内紀要『言語と文化』、さらに米国の専門雑誌で発表する。

### (4) 国際学会参加

毎年3月、米国各地で開催されるSAM(Society for American Music: アメリカ音楽学会)に参加し、研鑽を積み、情報交換及び共同研究を継続する。

### (5) 教育現場での教材の利活用と研究成果還元

特に新教材『音楽で異文化コミュニケーション2～*America Keeps Singing*』の勤務大学での利活用に努め、意義を考察するとともに

、放送大学「アメリカ文化研究会」のセミナーでも活用し、社会人の英語学習と米国理解の一助とする。

(6) 教員免許更新講習への還元

2009年11月 教員免許更新講習「英語教育と異文化理解」に本研究の成果を還元する。

(7) 社会人教育現場での還元

2009年5月の放送大学公開特別講義「伝え合う異文化コミュニケーション～日本語と英語」及び2010年2月の同特別講義「日本人の知らないフォスター」において研究成果の還元を行う。

(8) 社会貢献

授業交流（単位互換）特別開設科目（コーディネート科目）として、「ポップスで学ぶ総合英語と異文化コミュニケーション」を開講し、県下12高等教育機関及び一般市民に研究成果を還元する。

(9) レクチャー・コンサートの実施

フォスター楽曲を扱うレクチャー・コンサートを実施して、日本人の知らないフォスターの「アメリカ性」(Americana)を解説し、米国理解を深めるとともに日米の異文化交流に寄与する。

(10)国内共同研究への還元

2008年より共同研究員を務める立命館大学「ヴァナキュラー研究会」(代表：ウェルズ恵子教授)での研究発表を継続するとともに、米国研究者の招へいを鼓舞する。

(11)国際共同研究の継続

フォスターについて、国内ではその「アメリカ性」(Americana)を解説する一方、米国の研究者との共同研究にその「日本性」を導入し、グローバルな研究を進める。

(12)国際シンポジウムの企画

(11)の成果を基に、日本で米国からフォスター研究者とアーティストを招へいし、「レクチャー・コンサート&国際シンポジウム」を企画する。

4. 研究成果

(1) 教材の開発

新版『音楽で異文化コミュニケーション1』(以降『1』)(2010)には、フォスターの欄に4月にピッツバーグ大学で開催される「フォスター・シンポジウム」も加筆し、刊行直後、60部をルート博士に送付し、講演に備えた。

新教材『音楽で異文化コミュニケーション

2～歌い継ぐアメリカ』(*America Keeps Singing*) (以降『2』)は、米国史と連動する音楽を、フォスターの「オー！スザンナ」

(1848年)から『*Yes We Can*』のオバマ氏に捧げた'Eternity'(2008年)まで20曲を選曲し、3月のシンシナティでの研究成果も盛り込み、2011年に発行した。

(2) 国内外での研究発表

立命館大学「ヴァナキュラー研究会」での2010年3月の研究発表で、死後146年後の2010年4月、ピッツバーグ大学で開催される初の「フォスター・シンポジウム」の意義を論じた。

フォスター記念館で開催された同シンポジウムには、海外から一人招聘され、日本におけるフォスターの意義について講演を行い、米全土から結集した他の出席者(音楽学者、アーティスト、作家、歴史研究者等)及び聴衆から評価を受けた。

2011年の招待講演2件では、時空を超えるアメリカ音楽の歴史コミュニケーション力について講演した。大学英語教育学会九州支部大会では、前年度より研究中の『*Yes We Can*』を紡ぐ故キング牧師やオバマ大統領のスピーチから抜粋したスポークン・ワードとそのヒューマニティに焦点を当て、英語教育における意義について議論した。

また日本コミュニケーション学会九州支部大会では、『2』を米国19世紀から21世紀へのコミュニケーションという視点で研究発表を行った。さらに、翌年には同学会にて「スポークン・ワードのコミュニケーション力～グローバルボイスへ」というテーマで研究発表を行った。

(3) 論文発表

国内での論文は、「自習教材を使った英語教育と異文化コミュニケーション教育」、「伝え合う異文化コミュニケーション～日本とアメリカ」、「ポップスで学ぶ総合英語及び異文化コミュニケーション」、「♪*YES WE CAN*♪が歌い継ぐ歴史コミュニケーション」、「"America as Understood through Foster's Songs in Foreign Cultures ~ Foster's Music as Japanese Cultural Heritage"」、「*America Keeps Singing*～英語及び異文化理解教育を目的とした教材の開発」、「*America Keeps Singing*～異文化理解教育教材の開発」、「日米の文化とコミュニケーションの違いについて」、「歌い継ぐアメリカ～19世紀から21世紀へのコミュニケーション」などのテーマで発表した。

米国の学術専門誌 *American Music: Stephen Foster*には、2010年4月のフォスター・シンポジウムでの講演を基にした" Foster's Songs in Japan"を公表した。

#### (4) 国際学会参加

SAM (Society for American Music:アメリカ音楽学会) には、2000年3月、チャールストンでの初参加を機に会員となり、デンバー(2009)、シンシナティ(2011)、シャーロット(2012)、リトル・ロック(2013)と出席し、情報収集や意見交換を継続した。

例えば、2012年3月のシャーロット大会では、同学会の「アメリカ魂」の「進化」を体感した。参加者の一人、Robert Pielke氏が著した*Rock Music in American Culture*について、翻訳出版の可能性も含めて意見交換を行った。さらに、フォスター記念館館長Deane Root博士やJoe Weed氏との共同研究について意見交換を行った。

#### (5) 教育現場での教材の利活用と研究成果還元

勤務大学で前期開講の「異文化理解」では、音楽をアメリカ史との連動で編纂した『2』を副教材として使用し、複雑な米国理解を鼓舞し、後期開講の「英語I」では、『1』を副教材に用い、音楽を通じた英語及び異文化理解教育の可能性を確認し、更なる教材の展望を探った。また、放送大学の英語セミナーでも『2』を利活用し、社会人の英語学習と米国理解の一助とした。

#### (6) 教員免許更新講習への還元

2009年11月に実施した教員免許更新講習「英語教育と異文化理解」では、自主教材『太平洋を越えて』や『音楽で異文化コミュニケーション』を配布し、利活用すると同時に本研究の成果を還元した。

#### (7) 社会人教育現場での還元

2009年5月の放送大学公開特別講義「伝え合う異文化コミュニケーション～日本語と英語」及び2010年2月の同特別講義「日本人の知らないフォスター」において研究成果を還元した。また、後者においては、4月予定のピッツバーグ大学におけるシンポジウムでの講演を控え、日本人のフォスター像という視点でアンケート調査を実施した。

#### (8) 社会貢献

授業交流(単位互換)特別開設科目(コーディネート科目)として、「ポップスで学ぶ総合英語と異文化コミュニケーション」(4日間)を開講し、留学生を含む大学生や短大生、一般市民の受講性に本研究の成果を還元した。

#### (9) レクチャー・コンサートの実施

2012年9月、在福岡アメリカ領事館広報部と放送大学「アメリカ文化研究会」共催に

よるEric Lee Concertをコーディネートし実施した。

また、2013年2月には、草加市で開催されたNT Serendipityライブでレクチャー・コンサートを実施し、米国フォスター記念館ルート館長のメッセージと共に、日本人の知らないフォスターの「アメリカ性」(Americana)を解説し、米国理解を深めるとともに日米の異文化交流に寄与した。

#### (10) 国内共同研究への還元

立命館大学「ヴァナキュラー研究会」での共同研究を継続し、2010年3月、研究発表を行うとともに、米国研究者の招へいを鼓舞した。2013年3月1日の運営委員会で代表者が提案した2013年度の国際企画案が受諾され、米国招へい者との交渉はじめコーディネーターを任されることとなった。

#### (11) 国際共同研究の継続

フォスターについて、国内ではその「アメリカ性」(Americana)を紹介する一方、米国の研究者との共同研究にはその「日本性」を導入し、グローバルな研究を継続した。

#### (12) 国際シンポジウムの企画

(10)を受けて、2013年3月5日-10日、米国で開催された第39回アメリカ音楽学会(SAM)に出席中、既述のDeane Root博士とアーティストJoe Weedとの招へい交渉に成功した。

その後、立命館大学国際言語文化研究所企画に採択され、2013年12月7日、同大で開催される一般公開「フォスター レクチャー・コンサート&国際シンポジウム」には、客員研究員の身分で、コーディネーター、シンポジスト及び通訳として取り組む予定である。

本研究の最大の成果としてここに謝辞を述べたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

- ① Kazuko Miyashita, Foster's Songs in Japan: *American Music: Stephen Foster*, 査読有、Volume 30, No. 3, University of Illinois, 2013, 308-325, [http://muse.jhu.edu/journals/american\\_music/toc/amm.30.3.html](http://muse.jhu.edu/journals/american_music/toc/amm.30.3.html)
- ② 宮下和子, 歌い継ぐアメリカ ~19世紀から21世紀へのコミュニケーション、『九州コミュニケーション研究』日本コミュニケーション学会九州支部、査読有、第10

- 号、2013、37-46、  
[http://www.caj1971.com/~kyushu/KCS\\_10\\_05\\_Miyashita.pdf](http://www.caj1971.com/~kyushu/KCS_10_05_Miyashita.pdf)
- ③ 宮下和子、日米の文化とコミュニケーションの違いについて、査読有、文化伊集院第35号、2013、42-55
  - ④ 宮下和子、*America Keeps Singing*～異文化理解教育教材の開発、鹿屋体育大学外国語教育センター研究紀要『言語と文化』、査読有、第9巻、2012、1-10
  - ⑤ 宮下和子、*America Keeps Singing*～英語及び異文化理解教育を目的とした教材の開発、第60回九州地区大学一般教育研究協議会議事録、査読有、2012、50-57
  - ⑥ Kazuko Miyashita, America as Understood through Foster's Songs in Foreign Cultures ~ Foster's Music as Japanese Cultural Heritage, 『言語と文化』、査読有、第8巻、2011、1-13
  - ⑦ 宮下和子、♪*YES WE CAN*♪が歌い継ぐ歴史コミュニケーション、『九州コミュニケーション研究』、査読有、第8号、2010、10-20、  
[http://www.caj1971.com/~kyushu/KCS\\_08\\_04\\_Miyashita.pdf](http://www.caj1971.com/~kyushu/KCS_08_04_Miyashita.pdf)
  - ⑧ 宮下和子、平成21年度教員免許更新講習「英語と異文化理解」、『言語と文化』、査読有、第7巻、2010、82-86
  - ⑨ 宮下和子、平成21年度コーディネーター科目「ポップスで学ぶ総合英語及び異文化コミュニケーション」、査読有、同上、2010、78-81
  - ⑩ 宮下和子、「伝え合う異文化コミュニケーション～日本とアメリカ」、『言語と文化』、査読有、第5巻、2009、87-88
  - ⑪ 宮下和子、自習教材を使った英語教育と異文化コミュニケーション教育、第57回九州地区大学一般教育研究協議会議事録、査読有、2009、79-92

〔学会発表〕(計14件)

- ① 宮下和子、レクチャーコンサート、NT Serendipity Live、フォスター解説、2013.2.24、草加市(埼玉県)
- ② 招待講演：宮下和子、日米の文化とコミュニケーションの違いについて、伊集院地域文化協会講演会、2012.11.30、(鹿児島県)
- ③ 宮下和子、スポークン・ワードのコミュニケーション力～グローバルボイスへ、日本コミュニケーション学会九州支部第19回大会、2012.10.6、熊本学園大学(熊本市)
- ④ 宮下和子、歌い継ぐアメリカ～19世紀から21世紀へのコミュニケーション、日本コミュニケーション学会第18回九州支部

大会、2011.11.5、福岡医療短期大学(福岡市)

- ⑤ 宮下和子、*America Keeps Singing*～英語及び異文化理解教育を目的とした教材の開発、第60回九州地区大学一般教育研究協議会、2011.9.9、佐賀大学
- ⑥ 宮下和子、♪*YES WE CAN*♪を紡ぐスポークン・ワード～英語教育とヒューマニティ、大学英語教育学会九州・沖縄支部第27回大会、2010.7.3、西南学院大学(福岡市)
- ⑦ 宮下和子、アメリカ音楽のコミュニケーション力～♪*YES WE CAN*♪、九州フルブライト同窓会総会(招聘講演)、2010.6.24、九州大学
- ⑧ 宮下和子、♪*YES WE CAN*♪が歌い継ぐ歴史コミュニケーション、日本コミュニケーション学会第40回記念大会、2010.6.20、明治大学(東京都)
- ⑨ 宮下和子、アメリカ音楽のコミュニケーション力～時空を超えて、鹿児島哲学学会(招待講演)、2010.6.10、鹿児島大学
- ⑩ Kazuko Miyashita, America as Understood through Foster's Songs in Foreign Cultures ~ Foster's Music as Japanese Cultural Heritage, 1<sup>st</sup> Symposium on Stephen Foster (招聘講演、2010.4.24、ピッツバーグ大学(米国))
- ⑪ 宮下和子、アメリカ音楽のコミュニケーション力、立命館大学ヴァナキュラー研究会、2010.3.10、立命館大学(京都市)
- ⑫ 宮下和子、♪*YES WE CAN*♪が歌う歴史コミュニケーション、日本コミュニケーション学会第16回九州支部大会、2009.10.11、放送大学鹿児島学習センター(鹿児島市)
- ⑬ 宮下和子、自習教材を使った英語教育と異文化コミュニケーション教育、第57回九州地区大学一般教育研究協議会、2009.9.19、長崎大学
- ⑭ 宮下和子、音楽を使った英語教育及び異文化コミュニケーション教育、第23回大学英語教育学会[JACET]九州支部研究大会、2009.6.20、琉球大学(沖縄県)

〔図書〕(計4件)

- ① 宮下和子、フルブライターのミレニアム・アメリカ 改訂版、鹿屋体育大学国際交流センター、2012、23
- ② 宮下和子、音楽で異文化コミュニケーション1、鹿屋体育大学外国語教育センター、2011、49
- ③ 宮下和子、音楽で異文化コミュニケーション2～歌い継ぐアメリカ *America Keeps Singing*、鹿屋体育大学外国語教育センター、2011、51
- ④ 宮下和子、音楽で異文化コミュニケーション

ョン〈新版〉、鹿屋体育大学外国語教育センター、2010、49

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮下 和子 (MIYASHITA KAZUKO)  
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授  
研究者番号：20182016